

旧第11通学区高等学校教育懇話会 第5回会議録

旧第11通学区高等学校教育懇話会 第5回会議が、令和3年7月29日、午前10時00分、あがたの森文化会館講堂（ホール）に招集された。

会 議 日 程

1 開 会

2 挨 拶

3 会議事項

(1) 資料説明

入学者選抜の結果について 他

(2) 意見・要望の検討

意見・要望に係る論点整理

(3) 今後の進め方について

4 閉 会

○ 構成員

松本市長	臥	雲	義	尚
塩尻市長	小	口	利	幸
安曇野市長	宮	澤	宗	弘
松本市教育長	伊	佐	治	裕
塩尻市教育長	赤	羽	高	志
安曇野市教育長	橋	渡	勝	也
山形村教育長	根	橋	範	男
麻績村教育長	飯	森		力
筑北村教育長	滝	澤	昭	文
生坂村教育長	樋	口	雄	一
朝日村教育長	百	瀬	司	郎
JA あづみ 組合長	千	國		茂
松本機械金属工業会 会長	平	林	正	吉
長野県建設業協会 安曇野支部長	降	幡		真
松本商工会議所 会頭	井	上		保
安曇野市商工会 会長	高	橋	秀	生
国立大学法人信州大学教職支援センター 准教授	荒	井	英	治
長野県松本地域振興局長	草	間	康	晴
松本市PTA連合会 会長	山	本	美	帆

東筑摩塩尻PTA連合会 会長	坂 下 和 己
松本市中学校長会長（松本市立山辺中学校長）	横 田 則 雄
東筑摩塩尻中学校長会長（塩尻市立塩尻中学校長）	小 林 順 一
安曇野市中学校長会長（安曇野市立豊科南中学校長）	早 川 正 美
松本県ヶ丘高等学校長	杉 村 修 一
田川高等学校長	清 水 寛
豊科高等学校長	保 坂 美 代 子

○ 説明のため出席した者

長野県教育委員会事務局高校教育課参事兼 高校再編推進室 室長	駒 瀬 隆
長野県教育委員会事務局高校教育課 高校再編推進室 主任指導主事	山 岸 明
長野県教育委員会事務局高校教育課 管理係 主任指導主事	柳 沢 忠 男

1 開会

藤森教育部長 それでは、皆様おはようございます。本日はお忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまから、旧第11通学区高等学校教育懇話会の第5回会議を開会いたします。私は本日の進行を務めます、共同事務局の松本市教育委員会教育部長の藤森誠と申します。どうぞよろしく願いいたします。

初めに、皆様にお断りを申し上げますが、本日、この講堂は貸切となっております。別室では、音楽系の活動がございますので、音が聞こえてくる可能性がございますが、ご了承を願います。

また、前回に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策を施し、さらにソーシャルディスタンスを確保するために、座席配置も通常とは異なっております。構成員の皆様には何かとご不便をおかけしますが、何卒ご理解の上、ご了承願います。

それでは、会議に入る前に、お手元の資料の確認をお願いいたします。資料は4種類ございます。式次第を表紙に綴じたもの。そして、右上に資料1、資料2、資料3と記載された、それぞれ綴じたものがございます。ご確認をお願いいたします。

次に、次第を表紙に綴じたものをご覧ください。本日の会議事項であります。1として、事務局から資料説明の後、2、意見要望の検討、そして3、今後の進め方について、をご議論いただきます。次第をおめぐりいただきますと、開催要綱、構成員名簿、本懇話会のこれまでの開催経緯をまとめてございます。

構成員についてのご報告でございますが、JA松本ハイランド伊藤茂代表理事組合長様のご退任と、田中均新組合長様のご就任に合わせて、田中様が当懇話会の新構成員となりましたことをご報告申し上げます。

なお、本日の会議にご欠席のご連絡をいただいている方ですが、生坂村長藤澤泰彦様、ただいまご紹介いたしました、JA松本ハイランド代表理事組合長田中均様、塩尻商工会議所会頭中島芳郎様、安曇野市PTA連合会会長向山敬二郎様、以上の皆様でございます。

2 挨拶

藤森教育部長 それでは会を進めてまいります。初めに、事務局を代表して、長野県教育委員会事務局高校教育課、駒瀬隆参事兼高校再編推進室長より挨拶がございます。

駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課参事兼高校再編推進室長 皆様方、あらためておはようございます。長野県教育委員会高校教育課高校再編推進室長の駒瀬隆でございます。松本市、塩尻市、安曇野市の3市長様をはじめとする構成員の皆様におかれましては、公務など、ご多用の中をご参集いただきましたこと、県教育委員会を代表いたしまして、心から御礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、新型コロナウイルス感染症拡大の中での東京オリンピック、非常に心配な状況ではございますが、連日の日本選手の活躍には目覚ましいものがあります。そんな中、スケートボード女子ストリートで史上最年少の13歳10カ月、中学2年生で金メダリストになりました西谷椋さんを知る周囲の声として「椋ちゃんはスケボーをやらされている意識は一切ない。自分が好きだから、上達したいからやっているという姿勢です。」という報道がありました。学びも同じでやらされているのではなく、自ら主体的に学ぶこと。そして、一人一人の持つ個性や才能をできる限り伸ばし、生かしていくこと。これこそが、我々が目指すべき高校教育のあり方のひとつと感じたところでございます。

さて、今回の懇話会は、意見要望書の内容に関わる一步踏み込んで焦点を絞ったご議論をいただきたいと思っております。本日はその議論に先立って、これまで度重なるご質問やご意見をいただいている募集定員や、公私比率、公私の関係などについて、県教育委員会の担当者から改めて説明をさせていただく時間を頂戴いたしたいと思っております。

長野県の中学卒業生数は、平成2年、1990年の3万4000名あまりをピークに減少が始まり、今年、令和3年には1万8500名あまりとピーク時のおよそ54%となり、減少は今後さらに進む見通しでございます。このような激しい少子化ではございますが、私どもとしましては、高校の再編統合を単なる数合わせにはしない、学びの改革と合わせた高校改革にしたいと考えています。

しかしながら、第1期再編で再編が行われなかった旧第11通学区においては、多くの高校の小規模化が進んでいる状況への対応をしなければならないと考えているところでございます。この辺も念頭に置いていただきながら、ご議論をお願いいたしたいと存じます。

限られた時間ではございますが、本日もよろしく願いいたします。

3 会議事項

藤森教育部長 それでは、会議事項に移ります。開催要綱2の(3)により座長に進行を、副座長に進行補佐をお願いしております。座長の荒井先生、副座長の伊佐治教育長、よろしくお願いいたします。

荒井座長 皆さんこんにちは。信州大学の荒井でございます。

これまでの懇話会では、皆様のご要望を踏まえて、大規模アンケートや当事者に対するヒアリングなど様々な方法を使ってできる限り多くの方のご意見を頂戴してきたつもりであります。今回は、より一步踏み込んで、皆様のご意見に対して、こちらからの質問をさせていただくなどして、深掘りしていきたいと思っております。ぜひ忌憚のないご意見をいただ

けたらと思っております。

まず、前回の議事録の確認であります。あらかじめ送付させていただきましたが、誤字脱字等の修正以外に、ご要望等はありませんでしたので、ご了解いただけたらと思っております。

それでは次第をご覧いただけたらと思います。会議事項としまして3点用意させていただいております。これまでいただいたご質問等に対する県の教育委員会の方で、説明を、ということで、(1)としまして資料説明とあります。その後のその内容も踏まえまして、意見要望の検討ということで現時点でのたたき台をお示しさせていただいておりますので、それに関して、加筆等、或いは新たな部分を加えていただくなど、ご意見を頂戴したいと思っております。よろしいでしょうか。

それでは会議事項(1)資料説明ということで、それぞれ皆様方、資料の1の方をお出しいただけたらと思います。これまでの懇話会でご意見、ご発言等いただきました内容に関して、改めて事務局の方から応答する機会というのを設けさせていただきました。現状の入学選抜の結果の他、募集定員や公立と私立の比率についての現状、さらには、教員の資質能力の向上や、職業高校も含めた、様々な論点、およそ10項目程度ありますけれども、冒頭資料の説明の方、そして資料とともに、県の教育委員会の担当者からの見解の方を、皆さんの方にお伝えいただくということを考えております。

それでは、事務局の方から説明をお願いいたします。

柳沢長野県教育委員会事務局高校教育課管理係主任指導主事 改めまして、こんにちは。私、長野県教育委員会事務局高校教育課管理係、主に人事管理、学校管理の方を進めさせていただいております、定数担当、募集定員の担当の柳沢忠男と申します。ご説明申し上げます。よろしくをお願いいたします。それでは着座にて失礼いたします。

ご覧いただいております資料1、1から4について、私のほうからご説明を申し上げます。まず、1並び3についてご説明申し上げ、そのあと2、最後に4という形で、順番前後しますがご説明申し上げてまいりますので、よろしくお願いいたします。

まず、今年度の入試結果について、でございます。皆様方、4ページをご覧ください。資料a、平成3年度長野県公立高等学校入学選抜の結果について、ということでございます。こちらは括弧が前年度の数字でございますので、比べていただきながら見ていただければと思いますが、ご存知のとおり、中学生の卒業生数は減っております。そうした中で、志願倍率また進学率ということでこちらに記載してございます。教育委員会定例会の資料をそのまま転記してございますが、公立全日制の割合が、基本的に全県的に減りまして、進学率及び充足率ともに、私立の全日制の割合が増加してございます。また、定時制も減という形でございます。こちらにはございませんが、また特徴的な傾向としまして、通信制の直接の進学者が増加しているというところも申し添えたいと思います。

細かく、当地区、旧第11通学区の詳細につきましては後程、再編推進室の方からご説明をさせていただきます。令和3年度の考察につきましては、一番下の5番でございますけれども、高校改革の中で、県立高校の魅力を高めること、また募集定員については、公私協調態勢を継続していくことを考察としてまとめさせていただいております。

この公私協調態勢、公私比率につきましては、7ページをご覧ください。例年6月に開かれます、長野県公立高等学校連絡協議会の中での報告資料でございます。生徒急減期を迎

えるに当たりまして、急減期対策小委員会の中でも生徒の定員の決定方法について議論をしているところがございます。今年度の報告として、以下1から5までのところが決定してございます。皆様方、まず3番をご覧ください。1番の目的はよろしいかと思いますが、お互い、公立も私立も高校教育を担う立場として、ともに協調態勢を継続しながら、県内の高校生、また中学生の卒業先とか、高校生の学びの保障というようなことで進めさせていただいている次第でございます。

具体的には3番、5年度以降、さらに急減期を迎える中で、募集定員の決定方法について現在このような方向性が示されております。

(1)4通学区別の試算に基づく募集定員の決定、①地域の状況を反映するため4通学区別、北信、東信、中信、南信の中学校別の卒業予定者数や、また公立私立の入学者選抜の結果を用いて試算をしてまいりたい。また、②4通学区別試算結果を参考に全県の全日制の高等学校の募集定員を協議してまいりたいということでございます。これまでも、こちらの委員会で6月にまず私立、公立の配分を決めておるところでございます。

同様3の(3)、各私立高等学校の募集定員につきましては、今申し上げたとおり、この6月の会で決まっております。今年度に比べまして来年度は10名増えて、私立の方の定員を増やしてございます。各学校の設置者、学校ごとに、募集定員の決定にあたって、4通学区別の試算も今後も検討し、中に入れていこうということでございます。

また、この決定方法については4番、今後についてでございますが、今後も不断の見直しを行っていくこととしております。特に、県外からの入学者の取扱い、また募集定員算出に用いる指標については、こちら小委員会の検討を、また夏以降も継続しているところでございます。

前回の会議でご質問の中に、私学とのあり方に答えが出ていないと、また、割合について撤廃すべきというようなご意見も頂戴したということでございますが、私ども担当としましては、こちらの部分も含めまして、連絡協議会で検討していくということでございます。

しかしながら、こちらの懇話会様の方で意見要望書ということで、今、座長様からもございましたけれども、そちらの方にご意見として、もしくは要望として含んでいただくことにつきましては構わないと思っておりますので、忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。

それでは説明の1番と3番が終わりまして、今度は2番の募集定員につきまして、具体的にどのように進むかということのご説明でございます。1ページ目へお戻りください。入試につきましては、先ほど4ページでご覧いただきましたとおり、充足率が全体的に低下したところでございます。これにつきましては、私立高校の募集定員を超えた合格者、また、先ほど申し上げましたが、直接、中学卒業から通信制の高校へ進学する生徒が非常に増えているということも要因として考えられるところでございます。具体的に当地区でございますと、定員、約150名、私立の方は多く入学されていると。こちらの当地区、第11通学区、約120名足りていないのが公立でございます。その辺のところもご紹介申し上げます。

私立を含めた募集定員の決定につきましては、入試の状況をさらに細かく分析する形で、そちらにも記載しましたが、中学校の卒業生数、また隣接地区の状況、流出入の状況、また秋にございます入学志願の予定調査の結果、また、各校の校長先生方からの具申などによって総合的に判断し、教育委員会の定例会で11月に決定しているところでございます。

前回、安曇野市長様からご質問がございました、またご発言のあった内容としまして、本

年度、令和3年度の松本深志高校のクラス1増について、また、これに関わることと思われませんが、普通科重視、また専門科軽視、公立高校の魅力等についても、引き続きご説明申し上げます。

今年度の松本深志高校の1クラス増につきましては、この旧第11通学区の中学卒業予定者数の増加に対応したものでございます。結果的には、松本深志高校は、前年度減じた分を元の形に戻したということでございます。また、旧第11通学区の今年までの7年間におきまして、クラス減のあった中身でございますが、この7年間で計8クラス分、減じております。そのうち、専門学科にあたる学校のクラスは、8分の1、1クラスのみでございます。他7クラス分は、専門学科以外、普通科を中心に、減らしてきたということでございます。従いまして、専門学科をターゲットにし、募集定員を減じてきたというご指摘につきましては、やや異なるかなというところでございます。

もちろん県立高校も学校ごと、特色化、魅力化を進めているわけですが、これにつきましては、なかなか中学生に、違い等がわからない、伝わらないというようなことを課題として、懇話会の先生方からもご意見を頂戴しているということでもございましたので、これにつきましては、高等学校の校長会の方ともまた情報共有し、さらに、各校の取組みをしていただくようにということをお願いしています。具体的に、先般もございましたが市内の高校で、全国大会で優勝したりとか、また全国区で活躍をしている学校、また細かく地域の活動に参加している学校等、様々な魅力を各校とも発信しているという状況につきましては、ご存知かと思えます。

もちろん、定員を満たしていない県立高校等もございますが、いわゆる充足率というものにつきましては、私ども公立高校でございますので、全県の募集定員の状況や私立高校の入学の状況、また、少子化による間口の広がり等もありまして、様々な要因があつて、変動するものでございますので、定員を満たしていない学校が、魅力がないということではなくて、各校ともに魅力づくりは、さらに一層取り組んでまいりわけでございますけれども、定員が割れているということで、イコール魅力がないということではないということ、ご了承ください。

また、参考までに、普通科と職業科の割合につきましても、皆様方にご案内申し上げます。長野県の全日制、定時制の入学者につきましては、令和3年度の状況ですと、普通科に入学する生徒が約64%、専門学科に入学する生徒が長野の場合29%、総合学科に入学する生徒が6.5%ということでございます。全国に目を転じますと、この割合、それぞれ普通科が全国では73%、長野県は64%です。専門学科、職業科につきましては、全国の平均が21%、総合学科につきましては5.4%ということで、全国と比べましても、専門科の割合につきましては、およそ10%弱、むしろ長野県の生徒は専門科に進んでいるという現状がございます。総合学科につきましても、1%超ですが、多いということでもございますので、この辺のところもご了知くださいませ。今、こういった観点からつきましても募集定員に関わりまして、専門学科についても、十分間口は保障されていると、私どもの認識でございます。

最後、4番の公立高等学校の教職員の人事方針につきまして、第3回の会議で校長先生の在職、過去の在職が短く、学校改革が進まないのではないかというご意見も頂戴しております。これにつきましては、8ページをお開きください。こちらが人事異動方針でございますが、1番の教職員の異動について、(1)ア、学校規模、課程、所在地等を勘案し、適材適所

を旨として行うとともに、各校の課題等に応じた校長の1校の勤続年数の長期化を図り、中長期的視点から各校の学校運営に取り組めるよう配慮すると、こちらの記載がございます。6年前にこちらの記載を始めまして、この方針に従い、校長の配置を行っているところでございます。現状、平成30年度末に在籍平均が2.4年ということでございましたが、昨年度末、令和2年度には3年まで延伸しているということも、お伝えしたいと思います。引き続き、各校、校長を中心とした学校改革、魅力づくりを含めて、公立高等学校も取り組んでまいりたいと思います。

私からの説明、回答を含めて、以上でございます。

荒井座長 ありがとうございます。一旦ここで区切れればと思っておりますけれども、今、県の教育委員会の方から4点にわたる説明をしていただきました。

一つ目が入学者選抜の結果について、二つ目が、いわゆる公私比率に関しては、公立高等学校の連絡協議会の方で検討しているというふうなご説明いただきました。3点目は募集定員について。そして4点目は、いわゆる人事異動の方針について、県のこれまでの取組みと、それに及ぶ運用の実態の方をご報告いただきました。説明が、若干長くなりましたのでこの4つの部分で一旦区切りまして、ご質問等をお受けできればと思っております。追加での質問等いかがでしょうか。

宮澤安曇野市長 しっかり4つに区切つての質問になるか疑問もございますが、この「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」からしても、或いは、この懇話会の先ほど話があった4ページの考察からしても、この長野県教育のあり方というのは、公立高校だけが優先をされているように感じます。ただ、公私協調態勢を継続していきたいということは、最後には書いてありますけれども、結局は、県立高校の魅力をさらに高めていきたいということは、県教委としては、長野県全体の教育ということでなくして、公立高校、県立高校だけを優先していくというように捉えざるを得ません。

この前の、第4回の会合のときに、臥雲松本市長さんがおっしゃっておりました、この第11通学区、特に松本市内を中心に、私学が先行して様々な取り組みを行っているわけだと、公立と私立のあり方というのは根本的にもう変わってきているということでございます。従って、私も前に述べましたけども、公立私立の枠は、取り払って、長野県教育をどうするかという視点に欠けているのではないかなという思いがいたしております。私学は私学で生き残りをかけて特色ある高校づくりを進めています。長野県の高校教育の特色というのは何なのかははっきりわかりません。従って、職業高校軽視ということではないと言いながらも、旧第11通学区、12通学区、南農と穂商と池校を統合しようということが明らかに見えてまいりますし、この実施方針の中にも掲げられておりますとおり、職業高校がターゲットで、普通高校のあり方、長野県教育のあり方というのが見えてこないというふうに私は思いますのでその辺についてもう少し詳しくご説明ください。

荒井座長 ありがとうございます。今のご意見に関しましては、この後の資料説明の部分とかあるかと思っておりますので、まとめて県の方でまたご対応いただけたらなと思っております。

一つのご意見としては、公立私立のいわゆる比率に関して撤廃したほうが良いというご意見をまた改めてご発言いただきました。一つの意見として承りたいと思います。

他にこの四つの前半部分に関してご質問等あればと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

宮澤安曇野市長 今までもそうですけどね。質問に対して、意見として伺っておくというだけ

で、アライバイ作りに私は見えて仕方ありません。従って、疑問点に対しては、きちんと教育委員会が責任を持って答えるべきではないかなというふうに考えます。

荒井座長 では次の資料説明を終えた後に対応していただこうと思います。

この4つの前半部分に関してはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

今までのご質問に関して、この4つについて具体的なデータ等もお示しいただいたという事で、では、引き続きまして、続きの説明になりますけれども、教員の資質、能力の部分や、或いは今お話ありました職業高校のあり方、普通科改革等々に関して、引き続き、県の事務局の方から説明をいただこうと思います。よろしく願いいたします。

山岸長野県教育委員会事務局高校教育課高校再編推進室主任指導主事 皆さん、こんにちは。長野県教育委員会高校教育課高校再編推進室の山岸でございます。私から、5番から10番まで、まとめてご説明申し上げます。着座にて失礼いたします。

まず、5番の教員の資質向上についてでございますけれども、第1回の会議、それから第4回の会議で、教員の資質向上が急務である。また、教員の資質を高める必要があるというご発言。全くおっしゃるとおりでございます。

現在、長野県では、9ページ、資料dをご覧いただければと思いますけれども、長野県教員育成指標の策定について、この考え方によりまして、教員育成指標を策定して、キャリアステージごとの役割を明確にしたキャリアアップ研修の実施をしているところでございます。また、大学関係者、市町村教育委員会関係者、公立学校長、外部研修機関代表者等で構成いたします長野県教員育成協議会におきまして、毎年、検討を重ねていただいております。このような機関を通じまして、さらに効果的な研修について研究をしてまいりたいというふうに考えております。

続きまして、6番、職業高校の学習環境の整備についてでございます。この部分につきましては、初回の会議におきまして、安曇野市長様からご指摘がございました。また、第3回の研究部会からの報告でもご指摘がございました。学習環境整備、校舎改修や施設設備の更新等につきましては、職業高校のみならず、大変重要な課題として認識をしております。職業高校の学習環境におきましては、資料の6番にございますように、デジタル化対応、産業教育装置整備事業といたしまして、令和2年度、2月補正でおよそ15億7800万円の予算規模で、Society 5.0時代における地域産業を支える職業人材の育成のための、最新の産業教育設備を整備、これを現在進めているところでございます。

続きまして7番、私立を含めた県全体の教育のあり方、育てたい人間像について、ただいま宮澤市長からもご発言ございましたことにつきまして、ご回答申し上げます。まず、大前提としまして、私立高校のあり方というものにつきましては、直接的には、本懇話会では、議論ができないものと認識をしております。

しかしながら、本懇話会における各校の高校への聞き取り、これにつきましては、私立高校の皆様もご賛同いただきまして、ほぼ全校にご参加いただきました。資料2に私立高校の現況、これも掲載しております。このような、私立高校の存在を念頭に置いていただきながら、県立高校のあり方をご議論いただきたいと思いますと考えてございます。

また、県全体の教育のあり方、育てたい人間像ということでございますけれども、今回の高校改革は、関係する知事部局の担当者が専門調査員として加わって、産業ごとの人材育成のあり方等の視点を含めまして、ご協議、ご審議いただきました産業教育審議会、そして将

来像検討委員会、この審議のまとめの概要が、10 ページ、それから 11 ページに掲載してございますので、ご覧いただければと思いますが、これらの審議のまとめをもとに、学びの改革基本方針を策定し、それを具体化するべく実施方針を定めたものでございます。実施方針の冒頭をご覧いただきますと、高校教育が目指すべき方向性、そして育成すべき力として、四角で囲ってあります、①から③の観点をまとめてございます。ご確認をいただければと思います。

続きまして、8 番、望ましい学級数と再編の基準について、これは第 2 回の会議でご質問がございました。改めて回答させていただきます。表が掲載してございますけれどもこの表は、平成 28 年に、県立全日制高校すべてを調査したものでございます。例えば、一番上に理科 4 科目開講とございますけれども、これは 3 クラス規模の高校で 75% が実現できている、4 クラス規模の高校で 80% が実現できている、このようにご覧いただければと思います。下から 2 番目、理科専門教員担当でございますけれども、これは 4 科目とも専門教員、常勤の専門教員ということでございますが、担当をしている割合でございます。そして 1 番下は、総体参加部活数ということで、団体種目で大会に出た部活数でございます。ご覧のように、7 クラス、8 クラスの規模でございますと、ほぼ 100% 実現できる状況にあるというふうに考えられます。これらを総合的に判断いたしまして、都市部存立普通校は 240 人、6 クラス規模以上が望ましく、320 人規模、これは 8 クラスでございますが、この規模の学校の設置を目指すというふうにいたしました。

また、再編の基準でございますけれども、望ましい学級数の 3 分の 2 の学級数、これが 2 年連続した募集になった場合、中山間地は、1 クラスが 2 年続いた場合、これを基準としてございます。現在、再編の基準の適用は凍結をしているところでございます。

続きまして、9 番、懇話会のあり方、合同部会についてでございます。まず、本懇話会は、意見提言をまとめない、そして、県に提出をしていただきましたら、それで終わりである、ということは確認をいただいているところでございます。他地区は、地域協議会からご提出いただいた意見提案、これを踏まえまして、県が責任を持って、再編統合案をお示しをしております。本地区の懇話会、これは他地区と比べましても非常に精力的な数々の取組みをしていただいております、心から感謝を申し上げているところでございますけれども、徐々に本地区の実情が、明らかになってきているのではないかと感じております。

このようなことを踏まえまして、本地区におきましても、意見要望書の内容や、これまでの議論の内容を参考にさせていただきながら、他地区に準じまして、県が責任を持って、再編整備計画案を策定し、公表いたします。

また、先ほど安曇野市長様からご発言ありました、合同部会でまず 3 校のみ検討かということにつきまして、ご回答を改めて申し上げますが、3 校につきましては、小規模化が危惧をされております。率直に申しますと、再編の基準が適用される一步手前であるというふうに認識をしております。かつ、非常に親和性の高い地域の 3 校でございます、この専門校の魅力をどのように高めて、活力を維持、充実させるのかという観点で、開催していただいたものというふうに承知をしております。

従いまして、この中には、松工でありますとか、松商の議論は入ってこないということですが、当然、この地区全体の専門教育という視点においては、松工、或いは松商、このような専門教育がある学校についても、一定の議論が必要であるというふうに思っております。

います。

最後 10 番、須坂創成高校についてでございます。前回、高橋様のご発言から、須坂創成高校は、産業界と良好なコミュニケーションを築いているということだが、その理由を知りたい、ということでもございましたので、学校長に聞き取りました。理由としまして、様々あるということですが、主なものとして、以上 4 点を挙げさせていただきたいと思っております。口頭で申し訳ございませんが、まず 1 点目として、須坂創成高校は平成 27 年に開校しておりますが、その 6 年前、平成 21 年の新校準備会の発足時から、地元の県議、それから同窓会の皆さん、また須坂市などの強力なバックアップがあったと、これが大きな理由であるというふうなことでした。また 2 番目として、須坂創成高校に新たに工業科を設置したわけでもございますけれども、この工業科の学習内容の中に、地域の産業に適用する精密機械やメカトロニクスの学習をしっかりと取り入れて、地元の産業界との関係性を深めてきたということ。また、3 点目としまして、工業科のデュアルシステム、これを須坂市がコーディネートをしていただくということが、開校前から決まっております、開校後のデュアルシステムの実施がスムーズに移行できたということ。そして 4 点目といたしまして、これは総合技術高校のメリットとも言えると思っておりますけれども、デュアル協力企業へ商業や農業の生徒さんもインターンシップを積極的に実施している。そして、それによって、農業、商業の生徒さんが、毎年 20 名から 30 名は就職している。このようなことが大きいのではないかなというふうに校長先生からご報告を受けておりました。

一方、学科が連携した課題研究等の探究的な学びを進めることは、簡単ではないけれども、一生懸命やっていると。また、1 期生が現在大学 4 年生でありまして、この大学 4 年生の今後の進路も注視して、さらにデュアル協力企業との連携を図りたいというようなコメントもございました。私からは以上でございます。

荒井座長 ありがとうございます。資料 3 をご覧いただけたらと思います。こちら座長の立場として、大きく分けまして 12 の論点をまとめさせていただいております。

一つ目が、都市部存立普通校についてのあり方です。2 点目がめくっていただきまして、中山間地存立校のあり方。そして 3 点目が、専門学科のあり方、4 点目が、また後ほど説明させていただきますけれども、通学の不便さ等々に関する課題。そして続いて、また 1 枚めくっていただきまして、重複する部分もありますけれども、5 点目としましては、普通科教育のあり方、これは普通科改革とも関連する部分であります。続きまして、定時制、通信制のあり方。7 点目になりますけれども、私立高校との関係についてのあり方。8 点目になります。探究的な学び、主体的な学びの重要性について、そして、9 点目になります。高校における特別支援教育のあり方、そして 10 点目になります。地域連携のあり方、11 点目としまして、施設、設備のあり方、そして 12 点目としまして、その他という論点を想定させていただいております。

これ以外にも今後、加筆等させていただく可能性が十分ありますけれども、この県の資料説明をいただいた内容についてのご質問を受け付けた後に、順を追って、今の論点に関しての議論をさせていただくという運びになっておりますので、ご了解いただけたらなと思っております。

それでは、今、県の山岸主任指導主事の方から 5 点ほど説明いただきましたけれども、この資料説明に関して、ご質問等があれば受け付けたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

橋渡安曇野市教育長 安曇野市教育長の橋渡でございます。座ったまま失礼いたします。

ただいまの説明の9番の懇話会のあり方、合同部会について、確認をさせていただきたいと思っております。説明の中で、当懇話会のまとめはしない、という話がありました。また、合同部会の件につきましては、3ページの、9番の下に書かれておりますように、この旧第11通学区懇話会の中で、改めて、隣接する3校の専門高校についても、意見交換されるものと、このように説明をいただきました。私は、この安曇野、大北地域の高等学校を考える合同部会に参加した者として、このことを少し申し上げなければいけないと思ひまして。前回も発言しようと思ったんですが、機会がなかったものですから、今日まとめて言わせていただきます。

この合同部会の第1回の会議が3月11日に行われまして、冒頭、県教育委員会事務局が、この会は総合技術高校について一定の方向性や結論を見出すことは求めないと。さらに、小規模化が予想される3校の専門高校について、単独で存続させることが良いのか、それとも総合技術高校が良いのか、また、第3、第4の道を探るかなどについて、忌憚のない積極的なご議論をするために開催すると、このように説明をされました。そして、第1回の会議で、総合技術高校の必要性について説明を受けたわけですがけれども、これでは十分にわからないという構成員の声を受けて、第2回会議で、県内の先進3校、須坂創成、佐久平総合技術、飯田OIDE長姫高校の中から2人の校長先生がお見えになって、学校の現状や課題について、説明をされました。私はこの2回の説明によって、総合技術高校という姿が、具体的にイメージできて、私自身、以前よりも理解が深まったと、ようやくその姿が、見えてきたなという思いでございました。そのあと、構成員一人一人が、意見を一巡求められまして、そして最終的にこれが骨子となって、合同部会の取りまとめが行われました。3回目です。

時間的な制約もあった中で、荒井座長さんのお力で、ここに示されておりますように、この資料の最終ページに資料h、報告まとめということで、書かれているわけです。私としては、会全体としても、このまとめを了承したので、今更何を言うのかと言われるかもしれませんが、私の今の思いとしては、一巡の意見交換の後、これからようやく議論が始まるというところで、時間切れになってしまったという、印象を今でも持っております。そして、先ほど申しましたように、県教育委員会が確認をしたはずの、総合技術高校について一定の方向性は結論を求めないんだと言ったのにもかかわらず、何か、そういった結論めいたまとめになっているし、また、忌憚のない積極的な議論というそのことが本当に果たされたのかということになると、今でも疑問に感じております。そんなことで、この旧第11通学区としては、総合技術高校をどうするんだという議論を改めてしっかりしてもらいたいと思うんです。だから、少なくとも合同部会でこういう結論が出たから、私たちもそれでいいじゃないかと、ただ追認するのではなくて、お一人お一人が考えていただいて、ご意見をいただいたその議論の末に、そういうことを私は座長さんにも、また、県教委の方にも求めたいと思います。

もう一つは、総合技術高校とこのように書かれておりますけれども、このイメージというのは、皆さんそれぞれ違うんじゃないでしょうか。合同部会のときに、ある方が中学卒業の段階で、専門を工業にするか農業にするかというようなことを、中学生が選ぶことは大変、難しいと、困難な子もいると。入ってみたら、自分は工業よりも、商業の方が向いているという生徒もいるんじゃないかと。総合技術高校というのは、そういったものが一体となった学

校なんだから、入ってから、自分の進路をこっちにしたいと思ったら変えられると、そういう、総合技術高校は素晴らしいなという意味のことを言われたと、そういう発言があったと思うんですね。でも現実には、それは正しい認識じゃないんですね。私は須坂創成高校に伺ったときに、はっきり聞きましたけど、大学科、つまり、工業科、農業科、商業科を選んで入ったら、もうそれは変えられないんです。変えないのが原則なんですよ。大学科は変えないんです。だから、共通科目は受けられるかもしれないけれど、自由にそれが選択できるような学校だっていうイメージを抱いてしまったら、ちょっとそれは違うなと思いますし、そうなる中学校までのキャリア教育をどうやっていくか。その辺だってもっともっと考えなくてはいけないのではないかと、そんなふうに思っております。少し長くなってしまいましたけども、そんなわけで総合技術高校という、文字一つとっても、私たちがしっかりとした認識のもとに議論していかないと、この問題は、進まないんじゃないかなと考えますので確認のために、発言をさせていただきました。以上です。

荒井座長 貴重なご意見、ありがとうございます。今、大きく分けて2点ほどありました。

冒頭、県の教育委員会の説明の中で須坂創成高校の入学後の専門の変更がフレキシブルであるという点に関して、ただいま安曇野市教育長からは変更が難しいという情報提供のご発言がありましたが、事実確認として県の教育委員会として、いかがでしょうか。

山岸長野県教育委員会事務局高校教育課高校再編推進室主任指導主事 それでは現在、私ども持っている情報の中から、限定的ですが、お答えをしたいと思います。須坂創成高校は、農業、工業、商業別に募集をしておりますので、橋渡教育長様がおっしゃられたとおりでございます。しかしながら、制度的にはそうでない学校も全国的にはございます。例えば、小山北桜高校という栃木県の高校がございすけれども、これは食料環境科、建築システム科、総合ビジネス科、生活文化科と、この4科の学校でございすけれども、1年時は全学科基礎科目を全員履修をするという仕組みになっています。その後、希望によって、2、3年時は、食糧生産コース、環境創生コース等々、8コースの総合選択ということになっておりまして、その選択した科目の中身によって、卒業学科が決まると、というようなシステムをとってございます。全国的にはそういう高校がありまして、1年次に入って、自分の特性を見極めて、学ぶものを考えていくというようなシステムは可能であるということでご理解をいただければと思います。

荒井座長 ありがとうございます。今の情報によればということになりますけれども。総合技術高校の一つの魅力として挙げられてくるような、多様な進路選択ということに関しては、制度設計次第であるということでご理解いただけたらなと思っています。

ただ一方で、今のその情報で、そうだったのかというふうに新たな理解をされるような方もいらっしゃるかと思います。今2点ほどいただきました私、座長自身の認識ですけれども、一つは、「一定の結論を得るものではない」ということはご指摘のとおりであります。従いまして、配付資料の資料hのところでありますけれども、「報告まとめ」というところに関しまして、これまでも同様のご意見等をいただいておりますので、下線部の部分に関しましては、一つの結論というふうな、これはニュアンスの問題もあるかもしれませんが、こういった意見があったという並立的な書き方ですと、度重なるお時間いただいた皆様方に対しても失礼という側面もあると考え、数としてどういう見解が多かったのかという記載をあえてさせていただきました。改めてご確認いただきたい点であります。

さらに様々な懸念点等いただきましたので、次の段落におきまして、今後具体的な制度設計を検討していく場合、どのような論点があり得るのかという点も重ねて記載させていただいたことも再度ご確認ください。

最後にいただきました総合技術高校に関しましては、この後の意見交換の三つ目の論点、専門学科のところで、ぜひ総合技術高校の皆様方の認識やあり方、ご意見、そしてさらには、松本工業高校の部分についてということも、ここの論点の中に入れて議論したいと思っておりますので、安曇野市教育長がおっしゃられたように、この報告を受けてどう感じられたのかということも当然大事なことでありますけれども、それを踏まえて、どのように、皆様方がご意見をお持ちなのかということもお伺いしたいと考えています。

では、安曇野市長お待たせしました。追加であればお願いいたします。

宮澤安曇野市長 限られた時間の中での発言で申し訳ございませんが、橋渡教育長からもお話がございましたけれども、私はこの会議に最初から参加をさせていただいておりまして、県教委は、この地域の専門校を少子化に伴って規模が縮小して行って、ますます活力が低下するということが大きな理由だというように捉えております。また、そういった答弁でありました。統廃合を前提にですね、総合技術高校の設置も考えられるということで、総合技術校をもう設置をするという結論がありきのことしか言ってきておりません。この「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」、これ3年前に作られているんですけども、どうしてもこれに沿って、物事を進めたいという思いが感じられます。その中で結局、県教委の方針というのは、南安曇農業高校と穂高商業高校と池田工業高校の廃止をまずして、そして総合技術高校の設置を強引に進めようとしているんじゃないかなというふうにとらざるをえません。こういった中で、平成30年10月には、穂高商業高校の存続を求める会の皆さんが、1万2572人の署名を添えて、県知事、県議会議長、県教委宛に存続の要望書の提出をしております。また、南安曇農業高校の同窓会におきましても、本年の6月に、約9500人の署名を添えて、単独の存続を求める要望書を県教育長宛に提出をしております。延べでいきますと、地域の皆さんの2万2200人を超える署名が、それぞれ提出をされておきまして、職業高校としての単独の存続を求めているところでございます。市議会におきましても、それぞれ単独での存続を求める要望書の陳情を採択しております。議会は、住民を代表する二元代表制の1機関でございますので、この採択も、重いものがあるというように思っております。また、池田町の議会におきましても、本年3月に池田工業高校の単独存続を求める意見書を県知事と県教育長に出しているというふうにお聞きをいたしております。

県教委は、この地域にある専門校、単独校の存続を願う住民の皆さんや、代表する皆さんの声、これは、私は決して軽いものではないというふうを考えておりますので、今後の再編整備計画の検討にあたって、一体どのように受けとめられているのか。

私は前から申し上げております、この会議を、一つの会議の意見をお聞きしたんだと、後は県教委の権限によって統廃合を進めていくんだということだと捉えておりますけれども、もっと開かれた長野県教育を進めていく上では、広く県民の意見に耳を傾けるべきではないかなというふうに考えます。

私学との関係についても、ここには、私学の代表の皆さん方、おそらくお見えになっていませんよね。こういう中で、私学と公立のあり方について、公立だけを優先をするような長野県教育のあり方で本当に良いのかどうか、非常に疑問でございます。全国を見た場合には

この枠は取り払っているところがございますので、選択の自由をより拡大をして、生徒たちの要望に応えるということになれば、八二なり七三なりの枠は、私は撤廃すべきじゃないかと。これ自由に選べるところ、魅力のあるところ行くのは、もう当然の流れでございますので、そのことが重要じゃないかというように考えますけれども、その辺の考え方。

それから同窓会の関係の皆さんであるとか、現場の教職員の皆さんも、ほとんどここには入っておりません。こういった声を広く聞いて、県教委としては、拙速な答えを出すということではなくして、コロナで1年延びたと言うことですが、長野県教育のあり方について、長野県教育県と言われる再生を図るような、そんな教育委員会であってほしいなという思いがいたしておりますので、その辺も含めて、お答えをいただきたいと思っております。

荒井座長 ありがとうございます。市長、一つ伺いたしたいんですけども、公私立の比率を完全に撤廃するということをご意見ですが、完全に自由至上主義というふうなことを目指されているという理解でよろしいですか。

宮澤安曇野市長 いや、私はですね。選択の自由ということになれば、当然進学をする子どもさんたち、或いは親御さんたちがそういう思いがあると思うんですけども、やはり、選択肢を広げるということになれば、少子化の時代だから、こういった、問題が出てきたわけで、子どもが多いときには、私学振興を盛んに県としてもやっていたわけですね。子どもが少なくなれば、私学は少し端へ置いて県立高校のことだけ考えるのが長野県教育ではないと、もう少し長野県教育のあり方、かつてのように長野県が教育県だと言われるようなものを再生をしていくには、今議論を巻き起こしていくいい時期だというように考えております。で、期限を区切って結論ありきでなくして、もう少し広く市民、県民の皆さんの声というのを生の声を聞いてほしいなと、県教委がもっと足を使って現場に出てほしいなと、こういうことは以前から申し上げてまいりました。

荒井座長 ありがとうございます。個人的な意見もありますけど、公私比率の撤廃ということに関しましては全国で撤廃するところもあれば、逆にその撤廃している状況から少子化の影響によって新たに比率を設けているというところも出てきています。つまり、撤廃することで選択の自由が広がるとは必ずしも言えない、むしろ私立の存在が危ぶまれる状態が起こり得るということもありますので、少し追加でお伺いさせていただきました。今、様々なご意見等いただきましたけれども、県の方でお答えいただける部分ありますでしょうか。お願いします。

柳沢長野県教育委員会事務局高校教育課管理係主任指導主事 はい。ご質問、ご意見ありがとうございます。管理係柳沢でございます。資料1の7ページをご覧ください。今ご議論の中でご指摘ありました。私、あえて説明を少し飛ばしたんですけども、7ページの3(2)をご覧ください。私どもにつきまして、この小委員会の議論の中でも、連絡協議会でもご報告を申し上げましたけれども、私立高等学校の経営への配慮ということにつきましては、明確に謳ってございます。①募集定員の決定については、私立高等学校の持続的な学校経営を保障するため、中長期的に私立高等学校が一定規模を維持できるよう配慮していくと。今、座長様からもお話ありましたが、むしろその自由競争の中でというご意見もある中ではございますけれども、我々共存して、公教育を守っていこうという立場での小委員会または協議会での議論でございます。その辺につきまして、引き続き議論をしているところでございますが、その辺の理念は、私ども持っているということをご了解いただければということで、追

加でご説明申し上げます。

駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課参事兼高校再編推進室長 それでは、私の方から回答というか考え方を述べさせていただきます。先ほど宮澤市長さんも言われたように、それぞれの南安曇農業、穂高商業、池田工業の方から、地域、署名をいただいているのは承知しております。それについてはこちらでも回答をしているようなところもございます。その地域や同窓会の思いというものは我々十分存じております。ここに至るまでには、地域、同窓会の皆様方の協力があってこそ、この専門高校、地域の発展というものがあつたと思います。

その一方で、これから大きく社会が変わっていく中で、やはりこれからを見据えた場合には、新たなシステムというようなものも必要ではないかというようなことを考えまして、今回、方向性ということで、実施方針にも書かせていただいたというようなことで、決して地域や同窓会の皆様方の考え方を軽んじているということはありませんので、これは、強く話しをさせていただきたいと思っております。

あとは、この旧第11通学区ですけども、他の地区に比べまして非常に丁寧に、意見聴取、各市町村教委の方で現場に出て行ってもらって、意見聴取とかアンケート、さらに説明会もさせていただいておりますので、そういった部分では、非常に多くの方々、それがすべて満足できる状況かと言われると、そこまでいってない部分もございますけども、これできる限り、様々な方法で関わって意見聴取、説明しているというようなことがありますので、それはご理解いただきたいと思います。以上です。

荒井座長 ありがとうございます。私立高校のことに追加で説明の方を、座長の立場としてさせていただきたいと思っておりますけれども、意見要望書のたたき台のところでもありますけれども、松本地区の研究部会等々に関しては、私立高校、そして公立高校のすべての関係者をお呼びして意見の聴取をさせていただいております。構成員として私立学校関係者がいないということは事実ですが、別の機会を設けて、すべての高校、そして私立の高校の校長先生、管理職から意見はいただいているということもご承知おきいただけたらというのが一つであります。

また、今、県の方の説明でありました7ページ目の部分ですけども、長野県公私立高等学校連絡協議会というのは、まさに公立と私立の合意形成の場として設置されているものであります。他県の例ではこの連絡協議会がないところもあります。すなわち、自由競争主義をとっている仕組みになります。それに対して、長野県の場合は、公私比率を維持したいという両者の一定の合意のもとで議論がなされています。私立高校、とりわけ、私立といたしましてもたくさんいろいろな種類がありまして、進学重視のところもあれば、部活動等の課外活動に注力をする私立高校もあれば、さらには不登校、ひきこもりといったような、しんどい状況のお子さんのニーズを、汲み取っているというふうな高校もあることもありまして、ある一定程度その方達の選択の自由を保障するために、公私比率を設けてほしいというふうな、そういう強い要望もありまして、こちらの3にありますとおり、全県で一括した公私比率というものから、少しブロックごとの4通学区別の試算を踏まえて、制度設計していけばいいんではないかというふうなところを現在協議会の場で検討されていることと思っております。事務局にお伺いしたいのですが、今年度中に何かしら、何か一定の方向性をお示しいただけるといふような見通しでしょうか。

柳沢長野県教育委員会事務局高校教育課管理係主任指導主事 今、座長様からのご指摘の部分

も含めて、本年度も、来年度に向けてまた6月ございますので、そのところでは、大きく、もう待たなしてございますので、議論のものは出てくると思います。今年度、夏の終わりからまた小委員会を再開して、細かいところも含めて進めていくということでございます。

なお、公私の募集定員は、最初私立高校の募集定員を決める際には、いわゆる昼間の高等学校に進学する子どもたちの率を少し多めな形で選定しまして、その中で私立はまずこれだけ十分取りましようという形をまずとっているという決め方についてはご存知かと思いますが、現実的には先ほど言ったように昼間に通信制の高校等へ行っている子どもたちの数はあまり勘案していなく、むしろ緩く作ってありますので、私立高校様の方の定員につきましても確保させていただいているという現状がございますので、そのところも、ご理解いただければと思います。今のご質問の中、来年度に向けて、ある程度の方向性というのを、私学振興課の方も、目指しているというところがございます。

荒井座長 ありがとうございます。それでは、今までいただいた質問に対して、資料等を含めてご説明をいただきました。これを踏まえまして、資料3の方をご覧いただけたらと思います。これまで行ってきたアンケート調査やヒアリング調査、さらにはいただいたご意見を踏まえて、論点の方を設定させていただいております。

冒頭とても重要な現状認識を共有する上で、こちらの資料3の冒頭にあります学級数、そして在籍生徒数の見通しに関しての情報共有をした後に、個別の論点の議論を深めていきたいと思っておりますので、冒頭こちらの数字に関して、県の教育委員会の方からご説明いただけますでしょうか。

山岸長野県教育委員会事務局高校教育課高校再編推進室主任指導主事 はい。それでは私からご説明を申し上げます。この資料3は、意見要望いただくための論点としまして、座長様からご説明ありましたように、実施方針の再編の方向に係る論点から、4項目。懇話会の研究部会等のご発言から、8項目、これを論点として整理をしたものでございます。

1、実施方針「再編の方向」に係る論点に関わりまして、学級数及び在籍数を、都市部存立普通校、専門校、中山間地存立校の3区分ごとに、改めてご説明申し上げます。

まず、前提となります少子化の状況でございますが、今後15年で、この地区は約1000名、これは25クラス分でございますが、減少するという状況です。この数によりまして、近い将来、どのようなことが生じてくるかということをご想像いただきたいと思います。仮に、この旧第11通学区で、公立と私立の比率が、現在のまま保たれるというふうに仮定いたしますと、県立で17から18クラスの減が必要という数でございます。すなわち、平均に均しますと、すべての高等学校で1クラスないし2クラス、減少することが必要になるという計算でございます。このような状況下におきまして、現在の県立高校の在籍生徒数と再編に関する基準等を確認させていただきますと、まず、都市部存立普通高校は望ましい規模、これ6クラス規模でございますけれども、これより少ない募集となっておりますのが、上からいきますと、塩尻志学館、田川、豊科の3校でございます。また、都市部存立専門校、これは現在全校で望ましい規模、3クラス募集の定員でございます。そして、次に黄色の網掛けの高校でございますけれども、これは今後の学級減で再編の基準に該当する規模である高校でございます。都市部存立普通校は、塩尻志学館、田川、豊科の3校でございます。それから都市部存立専門校は、南安曇農業と穂高商業ということでございます。なお、再編の基準でございますけれども、これは今凍結中でございます。このような状況下で、実施方針の再編

の方向から論点を区分ごとに3点、絞ってございます。

まず、(1)として、三つの市に、規模の大きさを生かした都市部存立普通校を配置するというふうに記述がございませうけれども、現在、塩尻市、安曇野市に望ましい規模の都市部存立普通校が配置されていない現状でございませう。

めくっていただきまして(2)でございませうけれども、中山間地存立校は、現在、梓川高校と明科高校、この2校でございませう。(2)が一つの論点。

そして、(3)専門学科という論点でございませう。課題としまして、大きく三つのポツでお示ししてございませう。合同部会の報告をいただいたわけでございますけれども、これを受けまして、懇話会として、総合技術高校についてどのようなお考えをお持ちかということ。そして、松本工業高校について、それから、仮に総合技術高校を設置ということでしたら、松本工業高校との関連性等々、課題としてございませう。

(4)として、その他というふうに4項目、お願いをしてございませう。説明は以上でございませう。

荒井座長 ありがとうございます。ここに書かれている4つの項目を先行してまず挙げさせていただいておりますけれども、このあたり、時間の許す限り、議論を進めていきたいというのが、本日の段取りであります。残り30分ぐらいになりますけれども、一つずつ対応していきたいと思っておりますし、途中で終わればといいますか、時間切れになりましたら、今日はそこまでというふうな形にしたいと思っております。

それでは、一つ目になりますけれども、一つ目の論点として都市部存立普通校に関してということになります。今、説明ありましたとおり、再編の方向の基準を前提としました場合、塩尻、そして安曇野に関しては、その規模に応じた都市部存立普通校が、配置ができなくなるリスクが、想定されているということになります。このあたりに関して、皆様からのご意見をいただこうと思っております。いかがでしょうか。

赤羽塩尻市教育長 塩尻市教育長の赤羽と申します。先ほどの資料1の2ページの下段の規模数、クラス別によるパーセンテージが出ていました。5クラス、6クラスの充足する値は、こんなに%が違うのかなというのが、私、まず、驚きなんです、今日は現場の校長先生方3名いらっしゃいますので、少しこの適正規模に関わって、今までのご経験でもいいですので、このデータも含めまして、私は現場の声を少し先に聞きたいと思っております。

荒井座長 ありがとうございます。県の方でお示しいただいた適正規模の基準を踏まえて、現状どうであるのかということと、これが少子化の影響に伴って、どのような影響が起こりうるのかということについて、ぜひ現場の意見をというふうなご提案いただきました。では、3名の校長先生、もしよろしければ、ぜひ、現状と今後想定される課題についてお伺いしたいと思っております。どなたから、いかがでしょうか。

清水田川高等学校校長 こんにちは。田川高校の校長の清水寛と申します。座長からのご指名ですので、今の、現状について、私の方から説明をさせていただきたいというふうに思います。先ほど赤羽教育長からもありました、資料1の2ページ目のところ、本校は、今年度5クラスの完成形ということになります。資料3のところを見ていただきますと、田川高校5クラス、5クラス、5クラスの535名ということで、15クラスという形になっております。今年度と5年前のところを比べてみますと、535名の生徒、5年前は平成29年になりますけれども、731名ということで、約200人が減っている状況、クラスにして4クラスになりま

す。それをベースにして多様な選択科目というのを開講しているわけですがけれども、実際、クラス数とともに教員数が減りますので、ざっと講座として5年間でどのくらいの講座が減っているかというところだと40から50の講座が減っています。ただ、複数科目も開講している講座もございますので、実際科目数でいくと、10から15の科目が開講できないという状況です。

つまり、生徒の多様な進学先、或いは就職先、そういうものに合わせたものに対しての授業の保障ができないような状況が、今年度、さらに顕著になってきているという状況です。部活動等の話もありましたけれども、部活動についても平成29年ベースでいくと、32運動系、文化系がございましたけれども、今年度26ということで、これも活動できないという状況があります。実際、5クラスというところ、奇数というところもちょっと問題がありまして、そこに芸術とかの選択もありますけれども、音楽、美術、書道という形で選択をいただいています。ふたクラス3講座という形で選択をするんですが、ひとクラスの場合は、書道が大体少ないという状況で、音楽、美術という形で、クラスを偏った形で編成をせざるを得ないというような状況もあり、実際は4とか6とか8という、偶数のクラス数というのが、必要になってくるというふうに思います。

実際こういう形でいくつかの点で、生徒の保障もできないというところがありますし、また、Z世代、ジェネレーションZと言われている、今16歳から24歳ぐらいの生徒になると思うんですけども、その生徒たちが入ってきている。もうデジタルネイティブというふうに言われていますので、本校の生徒も携帯電話をほぼ持っているという状況です。ただその中でも、SNSでつながっているという生徒も多くて、実際、電話番号のメモリーはゼロという、子どもたちが多数います。つまりSNSのツイッターやそういうものだけでつながっていて、直接連絡をするということをやらないという生徒たちです。そういうふう考えたときに、この人間関係の希薄化というのが、高校卒業した後に多くの人間関係の中で過ごしていかなきゃいけない子どもたちを見ると、やはり高校現場において、最初のところになると思うんですけども、授業において、協働的な学びであったり、或いはクラスの中であったり、部活動の中であったり、そういう部分で人間関係を構築して、それが多ければ多いほどという部分で考えますと、現状で6クラス以上のところというのが、やはり必要になってくるのではないかなというふうに感じている次第でございます。以上でございます。

荒井座長 ありがとうございます。具体的な話大変参考になりました。では続いて、どちらからでも。では、保坂先生から、お願いできますでしょうか。

保坂豊科高等学校校長 はい。豊科高校の保坂と申します。私もその適正規模はどのくらいかというふうに聞かれると、率直に申し上げて、6クラスというふうに以前から申し上げてまいりました。これの根拠については、今日の資料1の2ページのところを見ていただければ、先ほど教育長さんからもご指摘ありましたように、非常に歴然とした数字が出ています。

それで本校は、現在、3年生のみが6クラス、1、2年生が5クラスに減ることになりました。長い間6クラス、3学年でやってきたんですけども、ここでこの地区内の中学生の減少に伴って1クラス減ということになりまして、今、教員数が削減されている最中です。今年度末の人事で、さらに2人の教員を減らさなければならないと、学級が1クラス減ると教員が2人減るというルールになっていまして、今年度末でさらに2人の教員を減らなければいけないということです。特に、高等学校で学習する理科については、科目が4つあるわ

けですけれども、その4つそれぞれに専門的な教育を受けた教員を配置するっていうのが非常に困難です。そういう状況になってまいります。

そうすると、これは生徒の進路についても大きな影響があることで、例えば、将来、大学で物理関係の勉強がしたいと思っている生徒がいたとしても、大学で物理の専門教育を受けた教員がいないということが、実際、多くの学校で起こっています。それから、芸術に関してもそうですね。高校で書道を学びたいなと思っても、書道の開講がないという、そういう学校もすでにたくさん出ています。そういうことがありますし、特別活動についても、以前も私は発言させていただいたんですが、クラブ活動の人数が非常に困難になっておりまして、最近では新聞等にも書いていただいたので、ご存知の方も多いと思いますが、安曇野市内ではもう野球部が単独ではどこも存立できませんで、今度は、もう6校合同という長野県の高校野球連盟の中でも、いまだかつてない状況が来つつあります。安曇野市内の4校に加えて、それだけでも足りなくて、池田工業さんと蘇南高校さんを加えて、6校で連合チームを作らなければいけないと、そういう状況になってしまっております。

ですから、これ生徒会なども全く同じ状況で、生徒が減ってくるとやはり生徒会活動というのもどうしても低調になりますし、文化祭であったり、生徒の自主的な活動というものが、どんどんパワーがなくなってくると、そういったことがありますので、やはりその数のメリットというのはもう、度々申し上げていることですがそれでも否定できない部分があります。ぜひ、そういった、やはり切磋琢磨できる環境を、この10代の時期に、生徒に保障してやりたいというのは、これまでの経験の中から切実に感じているところです。以上です。

荒井座長 ありがとうございます。では、杉村校長、いかがでしょうか。

杉村松本県ヶ丘高等学校校長 松本県ヶ丘高校校長の杉村でございます。今、お二方の校長先生からお話があったとおりでございます。本校の場合は、8クラスございますので、専門の先生がちゃんとそろっている。大体受けられる。3年生になったところでも、受験科目の選択はなるべく、開講していくというふうになります。それで、私、経験上、飯田OIDEも統合に関わらせていただいたところですがけれども、やはり一緒になることによって部活動が盛んになる、県大会に出る確率が非常に高うございます。この部活動というのは、実は中学生の中で、非常に求める部分もございまして、勉強ばかりではなくて、非認知能力は部活動で養われる部分がたくさんございます。そういう中でも、先ほど、豊科高校の保坂校長先生がおっしゃられたとおり、やはり部活動の活性化、そういう中で先輩、後輩、縦の糸ですかね、そういうつながりができるというふうなところでは非常に大きいのかなと思います。これ公立高校では全部、一律で文科省で決められている定数のとおりでございますので、1クラス減になりますと、2名の先生がいなくなるということです。6クラスでも、実は、県の方で非常にご苦労されて、教員を配置してもらっています。県単独の予算で配置してもらっていて、ぎりぎりもう6クラスだというふうに私も思いますし、学校の生徒の活性化という意味でも、ぜひ6クラスがもうぎりぎり。できれば7かなというふうに思っておりますが、そのような状況です。以上でございます。

荒井座長 ありがとうございます。今、3校の校長先生から、現場の状況をお伝えいただきました。度々、皆さん参照していただいている資料1の2ページの部分になりますけれども、6クラスというものが一つの基準の妥当性についてのご発言等ありました。

大きく分けて一つは授業というものです。まさにその授業を作っていくのは子どもたちと

教員のわけですけれども、その教員の専門性に裏付けられた授業というものができなくなるリスクがあるというお話が一つだったかと思います。まさに理科専科というものを、一つのいい例かなというふうに思いますけども、これは高校のみならず、公立の小中学校でも大きな課題になっている部分かと思います。

二つ目は特別活動の部分。クラブ活動や部活動、後は生徒会といったような部分に関しても、支障が出てきているということのご報告等をいただきました。

赤羽教育長、所感等いかがでしょうか。

赤羽塩尻市教育長 現状、ありがとうございます。今、荒井座長からありましたが、義務の小学校の学級数 12 とか 3 で減ると、専門の理科専科が切られるということがあります。中学校も学級減になると連動で 2 人とか、職員が減るという現状があります。中学生は、学校で高校に憧れるというのはやっぱり、学ぶ場と、それから、今、言われた人間で関われる部活とか、そこに大きな魅力を感じて、高校選択をしていくと思いますので、やはり適正規模というのは、私は外せないものだなという。もう現状でも生徒が減って、田川高校とかは、なかなかうまく動いてないという話も今お聞きしました。私は、そういうふうに考えます。以上です。

荒井座長 ありがとうございます。他にこの都市部存立普通校ということに関して、ご意見等あればいただきたいと思えますけれど、皆様方いかがでしょうか。

宮澤安曇野市長 あまり時間がないところ恐縮でございますが、今、論議されているのが、職業高校の統廃合だけが少子化の中で先に進んでしまって、普通高校の目指すべきあり方、長野県の普通高校って何を指すのかなど。例えば、冒頭に教育委員会の方からお話がありました。深志高校を本年度は 1 クラス増やした。松本 4 校中心になっているような感じがしないではありません。大体 7 クラスから、8 クラスを維持しております。

先ほどから話しがあるように、適正規模のクラスを確保するには、どうしても子どもの数をどう増やしていくかということでありまして、これは各自治体だけではどうしようもない課題であります。全体がどのようにしたら、少子化を乗り越えられるかということ。ただ、国を見た場合には、大都市に一極集中しているような状況の中で、大学のキャンパスを地方へ移すとか、或いは、このコロナ禍の中で自然の中が良いというようなことから、都市から農村に移住をしてくるような、そんな政策も打ち出されているわけですが。長野県の普通高校の目指すべき方向というのは、どんなことを考えているのか。都市部存立高校だけを重視していいのか。過疎過密がますます進む中で、地域を支える人材の育成、そして社会に出て即戦力になるような人材の基礎的な育成というものが、欠けているんじゃないかというような気がします。

普通高校の場合、例えば、子どもたちにしても、親御さんにしても、偏差値の高い学校へ入学させたいという本人の希望や親の希望があると思います。偏差値教育は、点数で大根切りをしていけば、非常にいいわけでございますが、これだけで本当にいいのかどうか。そうすると普通高校は、ある面では有名大学を目指すような、そんな高校の教育というのが必要になってくるんじゃないかと。そうすると、クラス数を増やすよりもむしろ、クラス数を減らして競争力を高めた方が、有名大学、有名なそれぞれの専門、技術分野を持ったところへ行けるんじゃないかという思いがいたしております。

例えば、先生方も教員の免許を取ったとしても、すべての学科を学ばせるというわけには

いきません。専門の学科があるわけです。医師の世界にしても国家試験で医師の資格を取ったとしても、今、ますます専門分野に分かれてきて、昔は、内科、外科、産婦人科ぐらいで大体、地域の皆さん方を支えられていたんですけども、本当に細分化されてきております。専門性を持った職業が分散してきておりますし、それから行政にしても、いろいろな資格を持った皆さん方が、専門性が求められている中で、長野県の普通高校の姿というのはどういうところに視点を置いているのがちょっとわかりかねます。

従って、第1次、第2次にこれから志望校を絞っていくわけですが、そういう中で、生徒が希望する高校に対してのみ、クラス数を増やしていくことが、本当に長野県の教育改革につながっていくのかどうか、私は非常に疑問に思います。

職業高校だけをターゲットにするんじゃなくて、普通高校の将来のあり方、どんな人間づくりをしていくのか、その辺がぼやけているというというか、論点がよくわかりませんので、はっきりと説明をしていただければと思います。

荒井座長 ありがとうございます。市長にお伺いしたいんですけども、クラスの数が減ったほうが競争力が高まるというのは、何と何との競争が高まるというイメージを持たれていますか。

宮澤安曇野市長 それは、おそらく先ほど申し上げましたとおり、本人も、親御さんたちも、偏差値の高い学校へという希望はあると思うんですよ。例えば、具体的に言えば、松本4校ほとんど減っていないですね、クラス数が。そのしわ寄せがひよっとしたら、例えばですよ、豊科高校なり、明科高校へしわ寄せがいつていると思うんですよ。狭くすれば、地域校へ行かざるを得なくなりますよね。そこが狭い、そこが不合格になった皆さん、二次募集かければそちらへ行くと、いうようなことも考えられます。そうすると普通高校をどうする、存続させるか、という面からすれば、中山間地校をどんどん減らしていくのでなくして、むしろ今、日本の国全体もそうですし、各自治体も人口減をどう抑えるか。同様に、関係人口交流人口を増やすかということに躍起になっているんですね。そういう中で、高校の子どもたちがいなくなる、一校がなくなるということは地域にとっては大きな影響力がもたらされます。地域の活性化、誰が地域を支えていくのか。そういった視点から、もう少し長野県教育全体を、論議をする時期ではないかなと。私は今、いい時期だというふうに捉えておまして、従って、拙速な結論を出すべきではないと。冒頭申し上げましたように、長野県全体の教育のあり方というのを真剣にみんなが、なるべく多くの皆さんが参加をして議論をしていく、ちょうどいい時期ではないかな、そんな思いがしておまして、何か畝雲市長もこの前言われておりましたけども、非常にこの会議がぼやけてしまっているんですね。

例えば、この実施方針から見ると、長野の地域においては、商業工業高校、長野県の中心的な、役割を果たしているということで、存続をさせるような内容のことが、ちょっと書かれているんですけども。長野だけが特化をされるということじゃなくて、私もそうすると、この旧第11通学区校においても、職業高校を特化して、長野県より全体の、職業高校のあり方をリードするような、そんな内容のものにすべきだと思いますし、以前から言ってまいりましたけれど、やはり指導者によって、大きく生徒に影響いたします。

特にスポーツなんかは指導者によって、影響を受けるということが多いと思いますので、その辺の教員の資質そのものも、高めていただかなければ、不祥事を起こすような教員すべてではないんですけども。少人数であっても、長野県教育のあり方っていうのが問われる時

代になってまいりました。

もう少し私学も含めて、全体の教育のあり方を考え直すべきじゃないかなというふうに思っております。

荒井座長 ありがとうございます。いろいろな論点いただいた気がしますが、クラスの数が減るということを含めて、競争力が、そちらの方が出てというふうなお話ありましたけれども。いわゆる偏差値というものの話と、クラスの数が減ることによる競争力の増減という、その辺り学校現場の感覚としてはいかがでしょうか。

先ほど、ちょっとそれと相反するような状況のお話いただいたかと思えますけれども、もしよろしければ、ご発言ください。先ほどのお話ですとクラスの数が減ることによって、切磋琢磨の機会や、関係性の網の目というふうなものが、少し影響が出て人間性が希薄化し、です。高校現場で可能な限り多様な機会をというふうなお話ありましたけれども、繰り返しの質問で恐縮ですが、もう少し追加で加えていただけたらと思えますけれども、どのようなものでしょうか。

杉村松本県ケ丘高等学校校長 先ほど申し上げたとおりなんですけれども。本当にやはり切磋琢磨するという部分のところでは、やはり人数が必要であるということは確かでございます。高校というのは、将来をほぼ、将来のことを考える一番大事な時期だと思っています。この3年間の中で、将来どうしたらいいのかという部分のところ。そして、都市部に集まるといいますが、松本の学校に、多くの安曇野市の中学生が来ております。塩尻市からも来ております。ですが、広域でやっていくわけですし、それで地域が廃れるとか、地域がどうこうとじゃなくて、いろんな子どもたちは地元を愛していますし、中学校からの協働の学習も本当生きていまして、そういう点で地域に誇りを持っています。学んで、また戻ってきて頑張りたいという子どもたちが多くございます。

これはやっぱり松本地区が非常に、この松本平地区、松本地区ではなく松本平ですね、この安曇野を含めて、そういうような部分のところが、ちゃんと小学校、中学校のところから育ってきていると思っております。ですので、ここに集まったからといって、松本市内に集まったからといって、その地域が廃るとかそういうことではないと思います。しっかりと持っています、考えを。その子たちが行っても、戻ってきてくれますし、また、もし国の段階に行っても、地域のことを考えてくれる人材になるというふうに私は信じておりますし、実感しております。以上でございます。

荒井座長 ありがとうございます。千國様、平林様、今の辺りの部分に関して、何かご感想等あれば、少しご意見いただけたらと思えますけれども。いかがでしょうか。突然で申しわけありませんけれども。

平林松本機械金属工業会長 松本機械金属工業会の平林でございます。私この会議に何回も出ているんだけど、何をやっているのか、臥雲市長の言われた論点をはっきりしないというのは、宮澤市長が言われた論点ではっきりしないとは違う意味に、私は取っています。

それで、今、高校の先生たちお話いただいたように、教育というのは本当に一番大事だと、産業界でも思っています。単純に高校を減らせなんて、そういうつもりで言うつもりはありませんけれども、何回も言いますように、現実というのがありますし、この少子化というのが、もっとひどくなるという、これももう明らかです。今年生まれるのは、去年でもそうですけれども90万人いないわけですから。先ほどの先生たちの話を聞いても、これはもう、ま

ずはこの教育委員会の方もはっきりしないんですけども、高校を減らすという、はっきりした論点を出してからやるべきだと思います。教育をどうするかというそういう会議はまた別に持って、これ自体はもっと論点がはっきりして、減らす、じゃあどうしようという、そういう会議にしていかないとこれはもう。とにかくこの前も私はもう出ませんと言ったんですけど、もう本当にこれ以上、私は出る気ないですよ、これ。

座長の先生も非常に難しい立場でやらされていると思うんですけども。これもはっきりその辺のことを出して、やっていかないと。なんか一部で理想を言いながら、結局、地域エゴをみんな言っているだけじゃないかというような会議にも感じられますし、ちょっとその辺のあり方は見直された方がいいと思います。言いたいことはいっぱいありますがそこで留めておきます。

荒井座長 ありがとうございます。では、千國様はいかがでしょう。

千國 JA あづみ組合長 JAあづみの代表理事組合長の千國でございます。この会議のメンバー当初からでございますが、なかなか機会が得られなくて、出て来ないでいるわけで、失礼をしております。

今、平林さんの話もあったんですけど、我々は教育のプロではもちろんないわけでありますので、そこら辺で私が発言することの適正性とか妥当性が欠けているんだったら、それはお許しをいただきたいと思いますが。この春も、入試が全県的にも1割定員割れの学校が急増しているという現実、今、平林さんもそういうお話されたんですけども、これはいずれにしても高校問題、待ったなしだと、この認識はまずは共有したいというふうに思います。

そこで、普通高校のことについては、私も私立高校のことが少し、苦になっていたというか、どういうことになってるんだろうかということで、お話を本当は聞きたかったということではありますが、今日、一定の話もお聞きをできたということでもありますので、その上に立って、やはりこれは再編をしていくべきだろうなというふうに思います。

専門校についてですが、これは私も地元等においても専門校、或いは先行する総合技術高校のヒアリングの場にも何回も出させていただきまして、このことについては、未だによくわかりません。はっきり言って、どちらがいいということには、私自身が、結論がそこに立ち至っていないということでもあります。しかし、いずれにしても、専門校と言えども、志願者がいなくなれば、当該校の存立はあり得ないということだけは事実なので、再編ということも視野にあるのかなというふうに思いますが、その結論が総合技術高校でいいのかどうかというところは、私はわからないということでありまして。この辺については、どうして総合技術校に立ち至ったのかと、他の選択肢があまたあると思うんですが、そういうものの選択肢があってそれを検証して、そして総合技術校というようなものに立ち至ったという経緯が、少なくとも私はお聞きしてないというふうに思うので。例えば、先ほどの宮澤市長もそんなことちょっとお話しされたけれど、県的な、県域で全体で、農業高校を安曇野に持ってくるとか、そういう発想っていうのは実はないのか、というようなことは、検証されたのかどうかという。商業についてもそうですけれども。いわゆる、私ども地元も含めてそうなんですが、何か数合わせ的なことに少しなっているのではないかという印象がやっぱりあるわけです。その辺の経緯というものをきちんと説明をして、そして、先ほど来の話からして、なかなかこの総合技術校については、地元を含めて、皆さんの合意をした中で、そういう方向に持っていくというには、現状の中では相当早いのかなというふうに、私は現時点での肌

感覚でそういうふうに思っております。以上です。

荒井座長 ありがとうございます。今のことに関して県の方でいかがでしょうか。

総合技術高校の提案の経緯について、ご説明いただけたらと思いますけれども。

駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課参事兼高校再編推進室長 はい。よろしくお願ひします。専門高校につきましては、長野県の旧 12 通学区ありますけれども、大きく分けて 1、2、3、4、東信、南信、北信、中信という 4 地区になるかと思ひます。そういう中においては、農業、工業、商業、そういうようなところの設置を考えているということになっておひまして、一つにまとめるということは考えておひしません。

そういう中で、今回、総合技術高校というような形で他の地区ではござひますが、これから長野県も含めて、産業分野を越えた複合的な産業の進展が見られるんじゃないかという中で、それを複合的な産業の進展という観点から、そうやって対応するような形での順応する力とか、社会の変化に柔軟に対応する力等々の育成が必要じゃないかというような観点から、総合技術高校ということで、学科間連携等々しながら、商業であっても工業の学びを知る、農業であっても、商業の学びをするというようなことは、これからの産業人材としては非常に必要じゃないかというような観点から、総合技術高校というような提案をさせておひしてあります。以上です。

荒井座長 ありがとうございます。それでは、今 11 時 50 分ぐらいになりましたので、ここで本日の意見交換については閉じさせていただきますというふうに思っております。

今後の見通し等について、事務局の方から説明の方いただけますでしょうか。

山岸長野県教育委員会事務局高校教育課高校再編推進室主任指導主事 はい。ご協議ありがとうございます。次第の (3) 番でございますが、次回の会議の日程ご提案を申し上げます。9 月 21 日火曜日、夕方以降からのスタートで大変恐縮ですが、県の総合教育センターの講堂でご開催をお願いできればというふうにご提案申し上げます。

荒井座長 ありがとうございます。これに関しては皆様方、何か追加でありますでしょうか。よろしいでしょうか。

はい。それでは座長としてはここでと思ひますので、事務局の方にお戻ししたいと思っております。よろしくお願ひいたします。皆様方ご協力いただき、ありがとうございます。

藤森松本市教育部長 それでは皆様、大変お疲れ様でございました。座長の荒井先生におかれましては、スムーズに議事を進行いただきまして、誠にありがとうございます。

最後に、事務局から 2 点ご連絡をさせていただきますと思ひます。ただいまもお話ありましたように、次回の会議ですけれども、9 月 21 日火曜日の夕方からということになりました。夕方開催というのは初めてでござひまして、構成員の皆様には大変ご負担をおかけしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願ひしたいと思ひます。

また、前回の議事録の件でございますが、本日の会議内で確定をしていただきました。どうもありがとうございます。前回、各市村のホームページに会議録を公開する旨、連絡をさせていただきましたが、まだ掲載ができておひませんので、次回会議までには掲載できるよう準備しますので、よろしくお願ひいたします。

事務局からの連絡は以上でございますけれども、最後に、ご発言のある方がいらっしやいますでしょうか。よろしいでしょうか。

5 閉会

藤森教育部長 それでは以上をもちまして、旧第 11 通学高等学校講話会 第 5 回会議を終了いたします。お忙しいところお集まりをいただき、誠にありがとうございました。お気をつけてお帰りください。